

「紫のこと」

高等学校で使用する国語の図版資料集には、十二単に代表される平安時代の衣装の襲ね色目の説明が出ています。

平安貴族たちは、季節ごとに複数の色の衣装を重ね着しておしゃれを楽しんでいました。源氏物語の玉鬘の巻には、光源氏が女君たちに配る衣装を選ぶ場面があり、平安貴族にとって襲ね色目は、自分の特長をアピールするためにとっても重要であったことがうかがわれ、季節感を表すだけでなく、衣装を着る人の人柄に即した色彩であることも大切であったようです。

玉鬘の巻で紫式部は、源氏物語の女主人公である紫の上に次のように語らせています。

『上も見給て、

「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はん人の御かたちに思よそへつゝたてまつれ給へかし。着たる物のさまに似ぬは、ひがひがしくもありかし」との給へば…（新日本古典文学大系より引用、以下原文引用は全て新日本古典文学大系による）』

「上」とは紫の上のことです。紫の上は衣装を選んでいる光源氏に、「どんなに美しい衣装であっても、それを着る人の様子に合わないのはひがひがしいことですよ」と言いました。「ひがひがし」とは「見苦しい」とか「まともでない」という意味ですので、似合わない色の衣装を着ている女房を、紫式部は宮中に仕えながら、見苦しくて苦々しいと感じていたのでしょうか。

そして、物語はこの後、光源氏が女君たちに何の衣装を贈ったかという場面に進んでいきます。光源氏は紫の上に『紅梅のいと紋浮きたるゑび染の御小桂、今様色のいとすぐれたる』、明石の姫君には『桜の細長に、つやゝかなる搔練とり添へて』を贈り、花散里には『浅縹の海賦のをり物、をりざまなまめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して』、玉鬘には『くもりなく赤きに、山吹の花の細長』を贈るといった具合と、女君たちへの贈り物が続きます。

原文で読むと、どんな色合いの衣装であるのか、私たちには分かりかねますが、女君たちに贈られた衣装の色合いについては、ていねいに考証した研究がいくつもあり、また、インターネットで検索すると、衣装を実際に再現している画像もありますので、興味ある方はぜひご覧ください。

上記の紫の上に贈られた衣装を現代語で分かりやすく言い直すと、「紅梅の紋を浮き出さ

せた紫根で染めた赤紫の色の小桂」に、「流行の紅花で染めた濃い紅色のとても美しい衣装」ということになります。

おそらく光源氏は最愛の紫上に、最も高貴で高価な衣装を選んだということを表しています。そしてそれは、作者の紫式部が、自身の創作した物語のヒロインで、光源氏に深く愛されながらも決して幸福な人生を送ったわけではない紫の上にふさわしい、最高に美しい衣装を贈ったということでもありました。

源氏物語の女主人公である女性をなぜ紫の上と呼ぶのかについては、さまざまな研究論文があるので、国文学に興味がある人には読んでいただきたいです。

光源氏は幼い時に母の桐壺更衣を亡くしていますが、その母によく似ている自分の父親の桐壺帝の妃の一人である藤壺女御を心から慕っています。

紫の上は藤壺女御の姪に当たり、面影がとても似ていることから、何が何でも自分の手元に引き取ろうとする様子が若紫の巻に描かれています。そうした思いを光源氏が詠んだのが次の和歌です。

手に摘みていつしかも見む紫の根に通ひける野辺の若草

藤壺女御と紫の上とは「紫の根に通ひける」間柄であり、そうした深い間柄である野辺の若草をいつしか手で摘んでみたい、すなわち、紫草の根によってつながりあるように藤壺女御と関係の深い紫の上をどうしても引き取りたいという思いが強く出ている和歌ということが出来ます。

藤壺女御の藤の花も淡い紫色であることや、藤壺女御と紫の上とが紫の根でつながっているような強いつながり、血縁関係があることなど、この和歌がもととなって、女主人公が紫の上と呼ばれるようになったと考えられているようです。

ただ、源氏物語の研究が進んでいく中で、紫の上という呼称の背景についてはさまざまな考え方が研究者たちから出てきているようです。

この光源氏の和歌のもととなっていると考えられている和歌が古今和歌集にあります。

紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ思ふ

という和歌で、少し意識すると「紫草を「愛する人」と例えると、その人に関係する人たちすべてが「あはれ」と感じられる」という意味の和歌です。

こうやって現代語に直してしまうと和歌のよさがなくなってしまうようにも感じますが、私はこの和歌が紫草の小さな白い花の可憐さをとてもよく表しているように思います。

そして、紫草の花の花弁が五弁あることから、105年前の府立第五中学校創立の際に校章のデザインに用いられ、現在でも小石川の校章となっているという経緯があります。

日本では紫色の染料は主にこの紫草の根、紫根から取っていました。

現在岩手県には南部藩以来の紫根染めを復興した技法が伝わっていて地域の特産としていますが、他の地域では昔から伝わる紫根の染色技法は伝わっていないようです。染色の専門家や研究者が「延喜式」などを頼りに染色技術の復元に取り組んでいます。延喜式とは、10世紀に完成した律令制の細目を記した書物で、その中には衣服の規定やどの位階の人がどんな色の衣服を着るか、その色を染めるための原料とその量など、きわめて詳細な規定が掲載されていて、古代の染色技法を調べる上で、重要な書物となっています。紫根から染められた紫色の装束は、きわめて高貴な身分の人だけが着ることを許されていて、当然中位以下の貴族は着ることができませんでした。なお、延喜式の古写本は国宝に指定されています。

紫根に含まれる紫の色素をナフトキノ系化合物のシコニンといい、化学式は $C_{16}H_{16}O_5$ です。

シコニンの面白い特性はPH依存性があることで、酸性で赤くなりアルカリ性で青くなる、すなわち染色工程のPHで色に変化が出るということです。

水には溶けにくい性質であるシコニンを抽出するために、昔の人はおそらく紫根を砕いて何回も絞って染色用の溶液をつくったと思われます。また、染まりやすくするために、あらかじめ媒染液に浸しておいた布を染色溶液に漬けることを繰り返して、紫色の布をつくっていったと思われますが、この媒染液のPHを調整することで、好みの紫色に染めたと考えられます。

江戸時代においては、紫根染めは青みの濃紫の「江戸紫」と赤みの紫の「京紫」があったということですが、これはおそらく媒染液に加える酢などの量を調整して色を出していったのでしょう。

なお、江戸時代には「似せ紫」という色もあり、紫根を用いて染めるのは高価であったため、寄り安価な藍染めに茜などの色を重ねてつくった紫色に近い色のことを指し、くすんだ赤紫色となりました。紫根から絞った染色液に布が染まりやすくするための媒染液には、樅の木を燃やしてできた灰を用いていました。樅の木の灰はアルミニウムを多く含み、とてもきれいに色が染まる作用があります。

万葉集には、

紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の街に逢へる子や誰れ

という短歌があり、現代語にすると「紫色染めるときには樅の灰を入れるもの、その樅の名前の市（海石榴市）で出会ったあなたの名前を覚えておくれ」という意味で、求愛の歌ですが、紫の染色に樅の灰を使ったことが序詞のように用いられています。

紫色の染料にはアカニシガイやイボニシガイというアクキガイ科の貝の分泌液から布を染める「貝紫」もあります。

古代ローマでは、同じアクキガイ科のシリアツブリガイから紫色に布を染めていたという

ことで、皇帝や元老院議員といった高い身分の人の衣服に用いられていました。

カエサルのマントは貝紫で染められた紫のマントだったということですし、時代がやや下りますが、イタリアのラヴェンナ、サン・ヴィターレ聖堂にある有名なモザイク画の東ローマ帝国ユスティニアヌス大帝は、貝紫で染めた上着を羽織っています。

貝紫は化学名を 66'ジブプロモインディゴといい、化学式は $C_{16}H_8Br_2N_2O_2$ で、この化学式と構造は、校長メッセージに以前掲載した「藍染の化学」の藍の染色原料であるインディゴとほぼ同じで、臭素 (Br) の有無の違いしかありません。

今回この稿を書くにあたって読んだ研究や説明の中に、貝紫を使って布を紫色に染めても、時間が経過すると紫色が藍色に変わってしまうということが書かれているものがありました。臭素が抜ければ藍染めと同じになってしまうことは化学式から当然のことと言えます。

さて、紫草に話を戻しますが、私が紫草を題材とした和歌で好きなのは、万葉集の額田王と大海人皇子の問答歌です。

額田王が大海人皇子に送った和歌が、

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

であり、大海人皇子から額田王への返しが、

紫草のにはほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも

でした。

額田王と大海人皇子の間には十市皇女という娘がいる仲ですが、このとき額田王は大海人皇子の兄の天智天皇（中大兄皇子）の寵愛を受ける立場となっていたと言われていました。

十市皇女は天智天皇の息子の天智天皇（弘文天皇）の後となり、天智天皇崩御後の壬申の乱で大海人皇子が天智天皇を殺して天武天皇として即位していることからすると、この問答歌の明るさと権力闘争の歴史とが対比されるように感じられ、とても興味深いです。

紫草は栽培が難しく絶滅危惧種に指定されています。

学校の近隣では小石川植物園でかろうじて栽培されていると聞いていますが、まだ確認することができていません。紫草の花を校章にしている小石川の生徒が、栽培方法を開発してくれることを期待しています。